

野 暉 穎
間 峻 原
光 康 退
辰 隆 藏
編

定本西鶴全集

第四卷

中央公論社版

昭和三十九年十二月十五日 印刷
昭和三十九年十二月二十日 發行

定本西鶴全集 第四卷
定價金 二千五百圓

編者

穎原退藏

暉峻康隆

野間光辰

發行者

宮本信太郎

東京都中央區京橋二ノ一

印刷者

高橋武夫

東京都新宿區市谷加賀町二ノ三

印刷所

大日本印刷株式會社

東京都新宿區市谷加賀町二ノ三

發行所

中央公論社

東京都中央區京橋二ノ一

振替口座東京三四番

電話 京橋(561)五九二一(九)

(小泉製本)

目次

凡例

解說

男色大鑑

卷一

卷二

卷三

卷四

卷五

卷六

三

五

一九

一九

五五

九一

一二三

一五三

一八三

武道傳來記

卷七		二二一
卷八		二四五
卷一		二七七
卷二		三一五
卷三		三四一
卷四		三六七
卷五		三九七
卷六		四二五
卷七		四五五
卷八		四八一

凡 例

一、底本は原則として初版本によつた。

一、活字化にさいして、漢字假名ともに行草體は楷書に改めるを原則とした。但し當時通行の略字、異體字、宛字はもとより、誤字、脱字、假名遣ひ、振假名の誤り等は、すべて原本通りとした。

一、原本通りと斷つておいても、活字化のさいの誤植または校正の誤りと思はれる恐れのあるものは、できるだけ校訂註を加へることにした。

一、原本の句讀點は一定してをらず、同じ丁においても。と・を混用してゐる場合がままあるので、その多く使用してある方のいづれかに統一した。

一、原本の丁數は、これを各丁の終りに括弧によつて示した。(一オ)は即ち一丁表、(一ウ)は即ち一丁裏である。

一、挿繪の存するものは、すべてこれを原本相當の個所に收録した。また表紙、自筆の序・跋・本文、その他參考に資すべきものは、口繪または本文相當の個所に掲げた。

一、頭註は紙幅のゆるす範囲にとどめ、おほむね解讀に支障なきを期した。

一、本卷所收の作品「男色大鑑」と「武道傳來記」の解説・校訂・頭註は暉峻康隆がこれを擔當した。

解 說

暉 峻 康 隆

男色大鑑

大本八卷十冊本と同じく八卷八冊本の二種の版本がある。刊記はともに「貞享四丁卯年正月吉日、大坂伏見吳服町淀屋橋筋、書林深江屋太郎兵衛、京二条通、山崎屋市兵衛板行」とあるのが初版本で、これに「江戸日本橋青物町、萬屋清兵衛」の名を加へたものが再版本である。八卷十冊本は、卷二・三十一丁のうち、はじめの十五丁を上、後の十六丁を下、卷七・二十七丁のうち、はじめの十四丁を上、後の十三丁を下、とそれぞれ上下に分冊し、合はせて十冊に仕立てたものである。ところが八冊本においても、卷二の十六丁と卷七の十三丁の柱刻に「下」の文字が残つてゐる。してみると、卷二が三十一丁、卷七が二十七丁と、他の卷よりもそれぞれ五・六丁ないし二・三丁多いのを奇貨として、最初から右の二卷を分冊して十冊に仕立てたものと思はれる。しかしたとへば八冊銀八匁で賣るべきところを、丁數をごまかして十冊に仕立て、銀十匁で賣るといふのは明らかにイカサマである。それにまた西鶴の作品は、處女作の「好色一代男」以來、最高大本八卷八冊といふ形ができてゐるので、かたがた讀者や販賣店の不人氣を買ひ、

あわてて八冊に製本仕直して賣り出したものと考へられる。そのことは當時の書籍目録にすべて八冊として掲げられてゐる事實からも推定されよう。したがつて十冊本は傳本がきはめてすくなく、わたしの知るかぎりでは、こんにち早稻田大學圖書館本の他に一本を存するのみである。

題簽左肩、「本朝若風俗」の五字を冠し、内題もまた「男色大鑑 本朝若風俗」とある。西鶴自序に「貞享四年童集丁卯陞日」の日附を有し、「鶴永」「松壽」の方形印記がある。柱題は「大」。本文板下の筆者不詳。挿繪は吉田半兵衛風。

改題本に「古今武士形氣」大本五卷五冊がある。奥附に大坂吉文字屋市兵衛、同源十郎、江戸吉文字屋治郎兵衛と板元だけが記載され、刊年月を闕くが、「大阪出版願書控帳」に寶曆七年十二月の板行願出となつてゐるから、翌八年正月の刊行であらう。

卷一目録

一、詠つゞけし老木の花の比

(卷四の四)

二、色に見込は山吹の盛り

(卷三の五)

三、雪中の時鳥

(卷二の五)

卷二目録

一、形見は二尺三寸

(卷二の一)

二、傘持てぬるゝ身

(卷二の二)

三、夢路の月代

(卷二の三)

四、東の伽羅様

(卷二の四)

卷三目録

一、編笠は重ての恨み

(卷三の一)

二、颯ころする袖の雪

(卷三の二)

三、中脇指は思ひの焼残り

(卷三の三)

四、薬はきかぬ房枕

(卷三の四)

卷四目録

一、情に沉む鸚鵡觴

(卷四の一)

二、身がはりに立名も丸袖

(卷四の二)

三、待兼しは三年目の命

(卷四の三)

四、色噪ぎは遊び寺の迷惑

(卷四の五)

卷五目録

一、涙の種は紙見世

(卷五の一)

二、命乞は三津寺の八幡

(卷五の二)

三、思ひ焼付は火打石賣

(卷五の三)

四、江戸から尋て俄坊主

(卷五の四)

五、面影は乗掛の繪馬

(卷五の五)

以上のやうに「男色大鑑」の卷二から卷五までの四卷を改編したものである。

「男色大鑑」といふ題名は、明らかに第二作「諸艶大鑑」に對する命名である。近世遊女列傳を意圖したそれに對して、これは時代の習俗である男色（衆道）列傳を意圖した作品である。すでに處女作「好色一代男」の第一章で、「色道ふたつに寝ても覺めても夢介と替名よばれて」といつてゐるやうに、色道といへば女色と男色の二道をさすのが時代の常識であつた。しかし女色を主とした「一代男」では、五十四章のうち男色をテーマとした章は三章にとどまり、續編の「諸艶大鑑」はそもそも遊女列傳であるから男色の介入する餘地はまつたくない。續く「好色五人女」と「好色一代女」の二作のうち、「五人女」の卷四と卷五で、挿話的に男色を取扱つてゐるにすぎない。色道二つのうち、もつぱら女色に筆をつひやし、男色を片寄せてきた西鶴が、「大鑑」と稱してゐるやうに、男色を綜合的に取上げて好色本の最後を飾らうとしたのがこの作品である。したがつてその意氣込みも強く、男色を推し女色をしりぞけた序に引き續いて、惣じて女の心ざしをたとへていはゞ、花は咲ながら藤づるのねじれたるがごとし。若衆は針ありなが

ら初梅にひとしく、えならぬ匂ひふかし。爰をもつておもひわくれば、女を捨て男にかたむくべし。
（中略）なんぞ好色一代男とて、多くの金銀諸々の女につひやしぬ。只遊興は男色ぞかし。

と序章で氣負つてゐる。自信をもつて執筆し、さればこそ彼のそれまでの好色本にはたえて見られない「鶴永」「松壽」の印記まで押したのであらう。

「男色大鑑」の前半四卷十章は、二・三をのぞいてそのほとんどが武家社會の衆道を扱ひ、後半四卷二十章は町人社會にぞくする歌舞伎若衆を対象としてゐる。これは世相のおのづからなる反映であつた。男色は中世以來武士階級がこれをたしなみ、町人階級もまたその影響のもとに、主として歌舞伎若衆を対象として男色をたしなんでゐたのである。したがつてそれはアブノーマルな行爲とは考へられず、ノーマルな習俗として行はれてゐた。そこに西鶴が男色をためらひなく、しかも肯定的に描きえた時代的な必然性を指摘することができるのである。

近世初期に成立もしくは刊行された衆道書に、慶長活字本の「犬たんか」、同書に西明寺殿百首を添へた丹緑本の「若衆物語」、承應二年刊の「犬つれづれ」などがあるが、それらはもつぱら中世的な僧房公家の稚兒若衆の身嗜みを説いたもので、いささかも近世色は見出されない。これはおそらく建設期の秩序を要求する精神が、新しい現實に對處する能力のないままに、とりあへず中世的な文獻を動員した結果と思はれる。しかし三代將軍家光の寛永期に入ると、エチケツトも美意識もない戰國的な男色の書を批判し

た「田夫物語」(寛永整版本)があらはれ、さらに寛永二十年には禮節、正直、勇氣、謙讓、無欲、克己、孝行、慈悲など、男色の義理を説いた「心友記」が刊行されてゐる。この書は寛文元年に「衆道物語」と改題刊行されてゐるが、男色はたんなる愛欲でなく、男性のモラル(武士道)をバックボーンとする衆道(若衆道)であるといふ近世的な男色觀がここに見られる。

さらにまた明暦三年には、主として武家の若衆のエチケツトを説いた「催情記」があらはれ、近世的な衆道は一おうその體勢をととのへるに至つた。その後繼續衆道書で、義理を説かないものはない。寛文五年刊の「よだれかけ」の卷五と卷六は、「男色二倫書」と題し、衆道の故事來歴を説いたものだが、それさへ「ちぎりを金石のかたきになづらへ、交を水魚のおもひにならひて、其二ごころなき旨をまもるは、さながら和のうちに義をもととするがゆへなり」と説いてゐる。

一方町人階級においても、戰國の餘風としての男色は、寛永六年における女歌舞伎の禁令に乘じ、美少年ばかりによつて組織された若衆歌舞伎を場として、廓とともに二大享樂機關として榮えることになつた。すくなくとも天和・貞享の西鶴時代まで、歌舞伎が伎藝よりも容色を主としたことは、その頃までの役者評判記が、伎藝よりも容色を主として品評してゐるといふ事實によつても知られよう。武士階級のそれとちがつて、これは茶屋によんで遊ぶといふ揚代まできまつた職業的な男色であるが、町人階級のリリエーションとして不可欠な歌舞伎の一側面として榮えたのであつた。

西鶴は「男色大鑑」を執筆するに當つて、とくに不案内な武家社會の衆道を描くについては、たとへば卷三の四「薬はきかぬ房枕」が、近世初期の寫本「藻屑物語」によつてゐるやうに、傳聞はもとより諸家の記録をあさり、前記の衆道教訓書類も参考にしたことは歴然たるものがある。しかし要するにその世界は、西鶴にとつては肯定的な態度で集めた資料なり傳聞なりを、せんさくするすべもなく描かざるをえない思想も習俗もことなる世界であつたから、序や序章で示した讚美的な態度をおし通すことができたのであつた。

ところが後半四卷の歌舞伎若衆の世界はといへば、西鶴にとつては生活圏内であつた。西鶴も出句してゐる狂言作者・富永平兵衛撰の俳書「道頓堀花みち」（延寶七年刊）に名を連ねてゐる役者、坂田、上村、小野山、袖岡、岑野、光瀬、松島、小嶋、小勘などが「大鑑」に登場してをり、また西鶴の大阪道頓堀役者評判記「難波の良は伊勢の白粉おしろい」に收載の役者二十七人のうち、十五人までが「大鑑」に登場してゐる。つまり西鶴にとつて上方歌舞伎の世界は、樂屋まで知りつくした生活圏内なのである。だから、たとへば卷六の五「京へ見せいで残りおほいもの」や、卷七の五「素人繪にくや金釘」、卷八の四「小山の關守」、同じく卷八の五「心を染し香の圖は誰」の章などのやうに、西鶴自身が登場する身邊雜記的な作品も散見してゐる始末である。

しかも元來が打算のない武家社會の衆道とちがつて、この世界の男色は職業なのであるから、否定面が

多いのは當然である。作者としてはいふまでもなく序や序章で示した肯定的な態度をおし通すべきであり、また實際に卷七の三「袖も通さぬ形見の衣」の章のやうに、義理や情を強調した作品もまま見受けるのであるが、知り抜いた否定面に目をふさぐことができず、折にふれてづけづけと役者の痛いところを衝いてゐる。「身過程世にかなしき物はなし」とか、「是を思ふに薄命の身に替らず、品こそ違へ遊女に同じ」といふ言葉が散見し、前半四卷の讚美的な創作態度は、明らかにくづれてしまつてゐるのである。作者と對象との距離の相違がもたらした創作態度の變化にほかならない。

しかし「男色大鑑」は、時代の習俗としての男色を形象化した最高の文學であることにはかはりはないし、また作者にとつては好色本から「武道傳來記」や「武家義理物語」などの武家物へ轉出する契機となつた、という意味において意義ある作品である。

武道傳來記

太本八卷八冊。題簽左肩、「諸國敵討」と冠し、内題下にも同じく旁書してゐる。自序に「鶴永」「松壽」の印記がある。本文板下の筆者不詳。挿繪は吉田半兵衛風。刊記に「貞享四年卯初夏、江戸日本橋青

物町萬屋清兵衛、大坂吳服町眞齊橋筋角岡田三郎右衛門」とある。柱刻に「武道」と「武道鑑」の二種が入りまじつてゐる。「武道鑑」とする柱刻は次の通りである。

卷一―十三丁、十四丁、十六丁、二十四丁。

卷三―十七丁より二十丁まで。最後の二十一丁は「武道」。

卷四―二十三丁すべて「武道鑑」。

卷五―五丁、八丁。

卷七―二十丁すべて「武道鑑」。

そもそも柱刻は書名か副題の一字ないし數字をとつて刻するのを常識とする。してみると本書の場合は「武道」が正常の姿であるのに、書名とことなる「武道鑑」の柱刻を部分的に残してゐるのは、最初の書名がたとへば「本朝武道鑑」などであつたに相違ない。ところが板木もそれで彫り上げた出版まぎはになつて改名しなければならぬ事情が発生し、俄に「武道傳來記」と改め、柱刻もそれに合はせて「鑑」の一字を削りはじめたものの、出版予定日の間に合はず、「武道鑑」の柱刻を部分的に残した不様な姿で急遽刊行したものと思はれる。

それまでにして刊行を急いだ理由として思ひ浮かぶのは、本書刊行の翌五月、同じく大阪の板元西澤太兵衛方から出版された「武道一覽」八卷八冊の存在である。題簽に「新板 武道一覽」、内題も同じである

が、柱刻は「姿」とある。してみるとこの書も、刊行に際して急遽改題したか、もしくは舊板を改題して新板めかしたか、そのいづれかであらう。神保氏入道の序によれば、西澤貞陳こと板元の西澤太兵衛（西澤一風の父）の草稿を神保氏が校訂したもので、収める十四話はすべて復讐譚、信長・秀吉の元龜・天正時代の事件で、その多くは「甲陽軍鑑」に取材したものである。

おそらく西鶴の復讐小説が出版されることを察知した板元西澤太兵衛が、それに便乗して題名も似通つた復讐小説の刊行を企圖したので、さらにそれと知つた西鶴の板元岡田方では、一刻を争つて四月中に改題刊行を強行したので、前名をとつた柱刻を残すといふ失態をあへてしたものと思はれる。去々年の貞享二年正月に「西鶴諸國ばなし」が刊行された際、同年同月に時を同じくして、同じ諸國咄である「宗祇諸國物語」が、京都の板元西村市郎右衛門方から刊行されたのも、同様に西鶴の名聲に便乗もしくは對抗しようとした動きであつたと考へられる。貞享度に入ると作者西鶴の存在も、ようやく出版界の注目の的となつた感が深い。

中世の「曾我物語」や謡曲の「望月」や「放下僧」、近くは假名草子の「堀江物語」、さては去年江戸で出版された石川流宣作の「好色江戸紫」など、遠く近く復讐を主題とした小説はすくなくない。しかしそれらはいづれも單獨の復讐を武家的な立場で、つまり肯定的に取扱つた傾向的な傳奇小説で、西鶴のこの作品のやうに、全國に題材を求め、近世武家社會におけるあらゆる種類の復讐を網羅し、きはめて自由な